人間研究　第 54 号　2018

E. ゴフマン相互行為論における自己概念の検討

芦　野　恵　理*

Considering the Concept of Self in Erving Goffman's Interaction Theory

Eri Ashino

0．はじめに

E. ゴフマンは、人々の日常生活における相互行為について論じた社会学者として広く知られている。本稿ではゴフマンの相互行為論における自己概念がどのようにとらえられてきたのかを整理し、検討を行いたい。

ゴフマンの相互行為論における自己概念がどのようなものであるかについて検討する際に有用であるのが、役割概念、そして役割距離の概念である。ゴフマンは既存の役割概概念について、人々の相互行為について考察する枠組みとしては不十分であるとして再検討をおこなった。その議論のなかでも特徴的であり、解釈を大きく分かつのが、役割距離という概念なのである。

ゴフマンは役割について「特定の位置における諸個人の典型的な反応」と規定している（1961, 訳書 1985,p.95）。そのうえで、「個人とその個人が担っているとされる役割との間の……鋭い乖離を役割距離 role distance と呼ぶ」（1961, 訳書 1985,p.115）。つまり、ゴフマンは役割と、その役割を背負う個人が実際にとる行為とを区別しているのである。この役割距離の概念をどのようにとらえるのかによって、ゴフマン相互行為論における自己概念の解釈は、議論が分かれるのである。

どのように分かれるかというと、一方は役割距離をとること自体を個人に課されたものとして見る社会決定論的立場、もう一方は役割距離をとるという行為を主体性の現れであるとして、そこに一元的な自己の在り方を見るシンボリック・インタラクショニズム的立場である（近藤 2000, 坂本 2005）。たしかにゴフマンの対面的相互行為の考察のなかでは、後述するように、対立してしまうような記述がある。しかし、そのどちらかであるとしてしまうのは、ゴフマンの相互行為論における自己概念を解釈するにあたって、妥当ではないように思われる。というのも、1982 年のアメリカ社会学会における会長演説「相互行為秩序」においてゴフマンは、彼の研究対象は、社会とは区別されつつも社会と緩やかな紐帯のある相互行為秩序であると明言している（訳書 1992）。本稿においては、こうしたゴフマン相互行為論における自己概念の解釈について検討を行いたい。

1．ゴフマンの役割距離概念の既存の解釈

本節においては、ゴフマンの自己概念についての既存の解釈がどのようなものであったかを概観する。先に述べたように、彼の自己概念は社会決定論的にも、シンボリック・インタラクショニズム的にも解釈されてきた。まずは、社会決定論的な解釈についてみていきたい。

1－1．社会決定論的解釈

社会決定論的、すなわち構造機能主義とは、社会構造を重視した立場である。この立場はリントンによって基礎づけられている。リントンは、役割と地位とを、地位なくして役割はなく、役割なくして地

＊　日本女子大学学術研究員

位はないもの、すなわち対概念であるとした。岩田によれば、リントンは社会システムを「諸個人観および個人と社会観の互報酬的行動を統制する、理想的な諸パターンの総体」（1988,p.12）であるとした。また、地位とは権利と義務の集合体で、役割とは地位のダイナミックな側面であるという。このことから言いうるのは、個人が地位を構成する権利と義務とを具体的に行使する場合において、役割を遂行していることになる、ということである。そして、役割とは地位を機能化するものにすぎない（ibid,p.12）。

また、個人は「社会体系の構成単位である地位のいずれかに配当されるときには、他の地位を占める他のメンバーから、その地位に付随する一定の役割をとることが期待される」（吉田 ,1980,p.106）。つまり、地位や役割が個人に先立ったものであるということが前提とされている。社会は、その構成員を、それぞれに相応しいような役割をとるように仕向け、彼らはそれに同調し、社会体系に参加する中で社会的な役割を内面化されていくのである。

ゴフマンは、「社会的なもの」を前提として人びとの行為者現実の在り方を分析しており、その社会とは、デュルケームのいうところの社会的事実であり、「個人にとって外在し、拘束性をもつ客観的事実」のことを指している（速水 ,2005,p.9）。

この特徴を以てゴフマンの役割距離概念を構造主義的に解釈する立場といえるのが、『ゴフマン世界の再構築』（1991）の編者である安川一、そこに論考を寄せる宮内（1986,1991）、そして片桐（2007）などである。安川（1991）は、われわれが置かれた状況のなかでしかるべき態度をとろうとするのは、「その効果を期待しているからでも、そうすることの正当性や正統性を信じているからでも、また、個人的信念を貫こうとしているからでもない」（pp.6-7）としている。つまり、役割に従ったり、役割から距離をとったりするということを、彼は主体性からではない、と断じている。また、宮内（1991）は、役割距離を、個々の具体的生活における要請や表出行動そのものの偶発性を、その原理やシステムとの矛盾を顕在化させないようにする、絶え間ない調整作業（p.91）であるという。その調整作業によって「〈共有〉される自己も、実際に参加者に共有されている認知的イメージではなく、参加者の共同の（自発的）関与によって読解される表出的意味であり、一つの「つくりもの」（リアリティ）であるがゆえにその共同状況に限定された「作業合意」にすぎない」という（ibid,p.91）。また、調整作業に駆り立てられた自己とは秩序維持のための犠牲であり、調整作業によって生み出される（生み出さなくてはならない）個性とは、個人に課せられた「受難」（ibid,p.93）であるという。

また、渡辺（2003）は、「視覚」という視点からゴフマンの自己論を分析している。「公共の場では、だれかから見られないことが困難なため、外見は読み取られざるをえない」（p.88）。見られることによって生じると予想される矛盾や錯覚から自己を防衛するために必要であるのが役割距離であり、ゴフマンの役割距離論文で示されるのは、「役割距離によって主体性を示すような人間ではなく、役割距離を要請する社会の姿で」、またそれは「「強迫観念」にとりつかれた人間の姿」を示すものでもあるという（ibid,p.89）。そして片桐は、人は、その場面においてふさわしい自己の呈示の在り方や、他者へのふるまいのあり方を求められるが、それらは相互行為場面の道徳的な（moral）秩序に規制されているものであり、ブルーマーの強調するような「主体的」な解釈行為の所産とは大きくかけ離れている（2007, p.9, 筆者要約）[1] という。

これらの役割距離の解釈、ひいては自己というものへの解釈は次のようなものということができる。自己とは、状況のなかで生まれる構築物であり、置かれた状況のなかでは役割距離的な自己表出の行動は、本人の意識、主体性といったものによるものとしてではなく、単に不可避のものとしてとらえられている。

近藤（2005）は、この立場の解釈を裏付けるゴフマンの記述をあげている。それは『出会い』における次の例示である。役割距離について説明する際に、外科手術の場を例示する。この場のメンバーは、手術の主任外科医と研修医、そして看護師である。主任外科医が負わなくてはならない役割は、執刀する医者、手術の統制管理をするリーダーといったところである。そこで主任外科医が行うべきことは「チームの他のメンバーに安全と確信を与えるような感情や思考の「外在化」externalization である」（1961, 訳書 1985,p.139）。いうまでもなく、手術は患者の命を預かる真剣な場である。しかし、そうで

あるからこそ、主任外科医は術中のすべてに対して真剣な態度をとることはない。研修医の犯した失敗を真正面から叱責すれば、失敗したことで混乱する研修医の混乱を助長することとなり、結果としてより大きな失敗を招くかもしれない。そのため、執刀医は、「真剣であるべき」という期待からあえて距離をとり、冗談交じりにたしなめることで、手術の危機管理を行い、その場のリーダーとして場を円滑に回すのである。

以上のようなゴフマンによる場の例示からは、役割距離とはその場の状況、相互行為を円滑に進めていくための状況管理の一形態として個人にある程度要請されているもの、すなわち一定の強制力をもったものとして理解することができる（近藤 ,2000,p.5）。

１－２．シンボリック・インタラクショニズム的解釈

次にシンボリック・インタラクショニズム的な解釈である。構造主義の過度に社会化された人間像へのアンチテーゼとして、この立場は生まれた。シンボリック・インタラクショニズムにおいて「社会行為者としての「個人」は、社会的状況およびその状況の意味を構成したり解釈したりする際の、能動的な行為主体である」。そして「「社会的相互行為」とは、利用可能な広範な役割期待から主体的に選択された目的にしたがって、諸個人が着手する行為の回路である」（岩田 ,1988,p.13）。

この立場における役割概念は、ミードの自己形成論における役割取得概念と関わっている。遊びのなかで、誰かの役を演ずることによって、他者からの自己に対する期待を理解することができるようになったり、全体のなかに自己を位置付けることができるようになったりする。つまり、想像によって他者の視点から自己について客観的にみられるようになり、見る自己としての主我（I）、見られる自己としての客我（me）が生まれるのである。先に述べた社会決定論的立場とは異なり、自己は行為の起点としてとらえられている。

この立場の代表的な論者として考えれられるのは、船津である。船津は、ゴフマンの論を「感情を正面から問題とし、感情の社会性、特に感情表現の社会性と自己意識的表現を問題とした」（2008,p.67）と解釈しており、役割距離概念に対しては、次のような理解を示す。

「人は、他者の期待どおりではなく、それとは意図的にずらす「役割距離 role distance」行動をとる。「役割距離」とは他者の期待とは少し異なったやり方をすることである。……「役割距離」において、人々が他者の期待に完全には同調せず、それに必ずしも全面的に従わない人間の在り方が示される。「役割距離」によって、ひとは他者の期待から相対的自由と自己の自律性を確保することになる」（船津 ,1998,p.413）。

また、深津は、「「客観的自己」と質的に異なる「主観的自己」の存在が、「役割距離」の契機となる」（1982,p.32）という。

これらの見解はいずれも、役割を遂行するなかで個人が呈示するイメージ「客我的自己」の背後に「主観的自己」の存在を見出している。他者に対して示して見せる自己は、一つの仮面にすぎないということ、そしてその仮面の下にこそ、真の自己が隠されている、ということである。

ゴフマンは、個人が演じる役割は、「必ず個人に関する何かを表現しており、個人や他者はその何かから、その個人についてのイメージを形づくる」（1961, 訳書 1985,p.100）という。このことによってゴフマンは、自己を、他者の期待からは相対的に自由な存在として想定しているようにも思われる。

以上、二つの対照的なゴフマンの役割距離概念の解釈を見てきた。社会決定論においては、役割から距離をとるということ自体が状況に包摂されており、自己は状況に埋め込まれているという解釈がなされ、シンボリック・インタラクショニズムにおいては、役割から距離を置くことは、個人が本当の自分を表現するための手段であり、またそれは自己というものが社会に対して、自律性や主体性を持ったものであるという解釈がなされていた。

これらは自己というものが社会に対して自律的であるのか否かという軸によって展開されているとみることができる。しかしながら、ゴフマンは社会に対してどうであるかという軸を設定したわけではないのではないか。というのも、ゴフマンは個々人の対面的な状況と、より大きな社会的な規範とは、緩やかではあるものの紐帯があると考えていた。そして、「私たちの大多数にとって、日常生活を他者たちの直接的面前において過ごすということ、言い換

えれば私たちの行いはそれが何であれ恐らく、狭義において社会的状況に置かれているということが、私たちの人間の条件の真実」（1983, 訳書 1992, pp.110-111）であるという。つまり、ゴフマンは、社会というものを、自己への対立概念としてはとらえていないのである。

であるならば、どのようにして彼の相互行為論における自己を解釈するのが妥当なのであろうか。本稿では、以上のような二極にあるような、矛盾をきたすような自己論をどのように共存させることができるのか、ということを検討していきたい。

2．プレイヤーとしての自己

本節においては、ゴフマンの著作における「ノーマルな人びと」[2] に焦点をあて、そこにおける自己のありようについて検討していきたい。ノーマルな人びとは、スティグマを持つ人びとと比べると、自由にふるまうことのできる、自由で自律的な存在であるように思われる。しかしながら、役割距離をとること、自己の呈示、あるいは状況についての解釈（状況の定義）を投企することは、たった一人のときにするものではなく、当然複数の人間が場に居合わせるときに行うものであり、他者もまた同じように役割距離的な行為、自己の呈示、状況の定義の投企を行う。また、行為者が、自分は場に居合わせる人々からこのように評価されてしかるべきと思うのと同様に、その場に居合わせる他者も、彼 / 彼女自身がそのように評価されることを期待する。つまり、様々な期待、思惑が交錯する中で、人々は必ずしも自由で自律的とは言えないのではないか。

ゴフマンの描くノーマルな人びとのありようを検討するにあたって有用であるのが、ゴフマンの提示した概念である役割、役柄、面目の三つである。というのも、これらは人々が場の秩序を維持すること、および個人の感情に深くかかわっているからである。坂本（2005）にしたがうと、この三つの概念は次のように説明することができる。

ゴフマンは、従来の役割概念から責務や期待、権利、義務といった規範性を排したうえで、役割を「特定の位置における諸個人の典型的な反応」（1961, 訳書 1985,p.95）と定義した。また、役割が準拠するものとしての社会的位置に代わり、より閉鎖的で自己補正的である「一つの状況にかかわりのある活動システム」――医師であれば、勤務先である病院で過ごす一日――を、その準拠とした。ゴフマンは「個人が、状況にかかわりのある状況の中で演じる役割は、必ず個人に関する何かを表現しており、個人や他者は、その何かから、その個人についてのイメージを形作る。しばしば、この彼のイメージは、単なる偶然や事件によって伝えられる以上のものであり、また、しかるべき組織の成員であること、そしてそこでの地位や役職の位置によって伝えられるものとは異なっている。そこで、状況にかかわりのある自己がその個人を待ち受けていることになる」（ibid,p.100）という。そして、その状況の範囲は拡大のできるものであるとした。なぜかといえば、「身体的環境それ自体が、そこにいる人びとのアイデンティティに関するさまざまな含意を伝える」（ibid,p.108）からである。つまり、意図しようがすまいが発された情報――身体的外見、技術や教育の習得、人との関係等々――から、人びとは、その個人についての結論を出そうとする。そしてそれらは、伝統的な意味でのそれには含まれずとも、役割として、個人が自己の同一視を引き出す際に利用することのできるものなのである。

役柄は、『行為と演技』（1959, 訳書 1974）において示された概念である。ゴフマンはこれを特に定義はしていないが、次のように述べている。

「演ぜられた自己とはある種の、通常は信をおけるイメージとみなされ、舞台上にあって役柄を演じている行為主体は、効果的に自分に関してこのイメージを抱いてもらうように努力するのである。……適正に演出され演ぜられた場面はある一つの自己〔のイメージ〕を演じられた役柄に帰属させるようにオーディエンスを仕向ける」（ibid,p.298）。

ゴフマンのこの記述から、役割が受け入れられるか拒否されるかという面に重点をおかれていたのに対し、役柄とは、それを受け入れたうえで（あるいは演じようと決めたうえで）、その役柄の保持を心掛ける個人の努力に目を向けたものということができる（坂本 , 2005, p.151）。

面目とは、「ある特定の出会いのさい、ある人が打ち出した方針、その人が打ち出したものと他人たち想定する方針にそって、その人が自分自身に要求する積極的な社会的価値である」（1967, 訳書

2002,p.5)。方針とは、その場にいる人たちや自分自身に対する評価を表明することをさしている。そして、面目は「認知されているいろいろな社会的属性を尺度にして記述できるような、自分をめぐる心象」であるともゴフマンはいう（ibid,p.5)。個人は何らかの表現により自らの体裁を良く見せることで、自分の職業や宗教を人により良く感じさせることができる。また、期待していた以上に好ましい面目が状況によってもたらされれば、個人はいい気分になったり、逆であれば嫌な気分になったりすることになる。

これらから明らかであるのは、役割や役柄が置かれた環境のなかでいかに行為するかという点に焦点が当てられていたのに対し、面目は、対面する他者に、そして個人の感情、ひいては自尊心の維持に焦点があてられた概念であるということである。面目が失われることで個人は一時的であれ負の感情を負いうる。ゴフマンは、面目を保とうとすることは、集団における社会的規範の一つであるという。面目が保たれている状態とは、「その人がとっている方針がその人の心象を無理なく表現し、しかもその心象が、内部的に統一されており、その場にいるひとたちが伝えてよこす判断や証拠によって支えられており、しかも、その場にある人間以外のいろいろな要素を通じて伝えられる証拠によって検証される場合」（ibid,p.6）のことである。そして「行動が自分には過ぎたものであるとか、逆に自分にはもの足りないという理由で、その行動を捨て、一方では、どれだけ高くついても自分をせかして他の行動をすることによって、自尊心を示すことを求められるのである。守るべき面目を与えてくれる状況に入ってゆくことで、人は目の前を過ぎてゆくいろいろな出来事の流れを防衛する責任をもつことになる。ある特定の意味深い秩序が維持されるように人は心配りしなければならない」（ibid,pp.9-10）という。これは、対面的な状況におかれたものであれば誰もが付与される相互行為の要件である。

しかしながら、面目を保つことが相互行為の目的としてあるわけではない（ibid,p.12,p.118)。面目を保つための行為が前面に出てくる相互行為とは、すでに破綻しつつある相互行為なのである。相互行為における秩序を波立たせないことによって、その場に居合わせる人々の面目は保たれるのである。ゴフマンは、場の秩序が維持されることによって、出会いは「個人がしっかりした現実感覚を引き出すことができるような機会」（ibid,p.139）になるという。ゴフマンの言うところの現実感覚とは、個人が、その場において方針を打ち出し、状況を定義しているという事実そのものである。つまり、場を構築している主体性のある自己を「感じられること」が行為者にとって重要なことなのである。であるからこそ、自己を脅かされない自然な形でかかわりあうことが相互行為においては肝要なものとなる。

自然な形とは、面目を保つための行為が前面にでないということである。この、前面にでないことをルールとしたゲームに、きわめて醒めた状態のプレイヤーとして参加するのがノーマルな人びとということができよう。

以上の概念の検討で明らかになったことは、役割や役柄、面目は、いずれもアイデンティティに関わるものだということである。そして、役割距離行動は他者からの期待から一定の距離をとるものであり、そこにはイメージとしての自己を操作する主体的な自己があるように思われる。しかしながら、面目の概念に注目すると、「自分がその場でうまく振舞えている」という自己の現実感覚、リアリティをつかむためには、「「イメージとしての自己」を他者から読み取り、それにそって「パフォーマーとしての自己」として演技し続けなければならない」（速水 ,2002,p.160)。ここに含意されるのは、面目が付与される場、すなわち人が二人以上居合わせる対面状況の秩序は、社会的規範と個人の自尊心の維持とで構築される非常に脆弱なものということである。

３．他者に介入される自己

この節においては『アサイラム』と『スティグマの社会学』を検討の対象とする。この二作品の分析対象はそれぞれ、全制施設の被収容者と、スティグマのレッテルを貼られた人びとである。常軌を逸しているというレッテルを貼られてしまっているという点でこの二者は類似しているが、先に述べたような秩序から一度離脱してしまった人々の自己呈示のありようをみることで、再度人々の主体性を取り出すことができるように思われる。

３－１．三つのアイデンティティ

ゴフマンは、『スティグマの社会学』においてアイデンティティの概念を細分化して提示した。社会的アイデンティティ、個人的アイデンティティ、自我アイデンティティの三つである。

先に検討したなかで、ゴフマンの自己論は、呈示するイメージとしての自己と、それを操作する主体としての自己があることが前提となっていた。ゴフマンは、これについてスティグマの社会学にて明確に定義しており、それが、社会的アイデンティティの下位概念である対他的な社会的アイデンティティと、即自的な社会的アイデンティティである。前者は、「相手の人にわれわれが付与している性格」であり、後者は「彼が事実もっていることを、求められれば明らかにし得るカテゴリー、属性」である（1963, 訳書 1987,p.11）。この定義に従えば、即自的なアイデンティティに照らして、外部からあてがわれた対他的な社会的アイデンティティを引き受けるか距離をとるかという決定をおこない、自己を表出するという一連流れのことを、役割を遂行するということができるだろう。そして、これらの概念を用いると、「スティグマは、対他的な社会的アイデンティティと即自的な社会的アイデンティティの間にある特殊な乖離を構成している」（ibid,p.11-12）。他者からの期待に対してマイナスに乖離するということである。

この定義から看過してはならないことは、スティグマは固定的なものではなく、誰がどのような状況でその型を持っているかによって、スティグマになる場合とならない場合とがあるということである。

しかしながら、人びとの目につきやすい、あるいはすでに露呈してしまっているスティグマを持った人々は、「ほかの人びとがどんなことを表明しようと、彼らは自分を実際には〈受け入れ〉（accept）てはいないし、また〈平等の条件〉で彼と交渉する心の用意もないことを感知している」という（ibid,p.18）。つまり、スティグマを持った人びとは誰かと相対するとき、常に不安を抱えていなくてはならないのである。たとえ、真正面から差別的な態度をとられたわけでなくても。前節で確認した、ノーマルな人びとによる、自己について他者から受け入れられるはず（したがって他者についても受け入れている）という前提での自己呈示に対し、スティグマのある人々は、その前提を崩された状態で自己呈示せざるを得ないのである。

スティグマとは、他者の期待と呈示しうる属性とが構成する負の乖離のことであった。即自的アイデンティティが求められれば明らかにしうるものとして定義されるのであれば、当然そこには「求められなければ」明らかにしなくてもよいような属性、カテゴリーが想定されているはずである。しかし、スティグマを持つ人々には、その選択が自由でないようだ。では、なぜこの呈示の仕方が固定されてしまうのか。これは自我アイデンティティの概念を用いて説明することができるだろう。

ゴフマンによれば、自我アイデンティティとは、「まづ何よりもそのアイデンティティが問題になっている当の個人が当然感じているはずの主観的、反省的なものである」（ibid,p.174）。そして、「個人が多様な社会的経験を経た結果、獲得するに至った自己の状況、自己の持続性、正確などについての自己了解」（ibid,p.173）なのである。つまり、自我アイデンティティは、主観的で反省的なものであるが、内閉的なものとして想定されているわけではない。「自我アイデンティティは必ず社会的状況に回帰する」（高橋 ,2000,p.40）のである。換言すれば、自我アイデンティティの形にしたがって自己呈示をし、呈示した自己が相対する他者の評価を経て自己に戻り、自我アイデンティティは再構築されるのである。スティグマを持つものは、内面化された他者の目によって、自己の内部からもスティグマとしてのレッテルを背負い、スティグマを持つものとして振る舞うことになってしまうのである。

ゴフマンの呈示した三つの自己概念の最後の一つは、個人的アイデンティティである。ゴフマンは「個人的アイデンティティという言葉で私は最初の二つ表象だけ、すなわち〈決定的な標識〉あるいは〈アイデンティティ・ペグ〉およぶアイデンティティ・ペグの助けをかりて個人に帰せられるにいたる生活史上のかけがえのない組み合わせを考えている。特定個人が他のすべての人びとから区別され、さらに、この区別の手がかりの周辺に、社会的事実についての一連の連続的な記録が帰せられ、綿菓子のようにからまって、ついには粘着力のあるものになり、それに、まだ伝記的事実が附着することがある」という（1963, 訳書 1987,p.95）。つまり、ゴフ

マンはかけがえのない、という語を使ってはいるものの、この個人的アイデンティティは、何か温かいものとか心の通ったものを想定しているのではなく、紙にも記録できるようなその人がこれまでの時間で積み重ねてきた――かけがえのない――事実を、個人的アイデンティティとしているのである。そのかけがえなさは、行為者が身体を一つしか持ちえないという物理的な事情に由来する。そして、個人的アイデンティティを構成する諸要素のうちの、特に個人が生きてきたことについての記録を、生活誌という。「個人がしたこと、および実際やれることはいっさいがっさい、彼の生活誌に包みこまれうるもの」であるという（ibid,p.104）。個人的アイデンティティの単一性は、社会的役割を演じている際に認められる自己の多様性と鋭い対照をなしている。すなわち、社会的役割の場合は手際よく自己を匿して、ある程度までは、それは従来の自分ではないということができるのに対し、個人的アイデンティティはその人個人を特定する、いわば事実としてのその人自身なのである。

以上三つを整理すると、自我アイデンティティの判断するところによって、呈示してもよいような情報を個人的アイデンティティから選択をし、結果的に他者に見せたものを社会的アイデンティティということができる。そして、個人的アイデンティティが取り入れられることで、自己は、生活誌の管理者として浮かび上がる。

このことを逆照射しているのが『アサイラム』において描かれる無力化された被収容者である。施設においては、自己についての情報を搾り取られ、規格化されてしまうことにくわえ、身体的自由を奪われることによって、個人は無力化されるのである。つまり、個人的アイデンティティをはく奪されることによって、人々の主体性は（だけではなく尊厳も）大きく損なわれる。

しかし、そうして無力化させられた人びとは、施設の職員を共通の敵としたような新しい集団を作ることによって、自分をあらたに集団のなかに位置付け、その状況に適応していく。自己を再編成するのである。これは、ゴフマンが『行為と演技』（1959, 訳書 1974）においていうところの、「表 - 局域」と「裏 - 局域」である。局域 region とは、「知覚にとって仕切りになるもので、ある程度区画されている場所」（1959, 訳書 1974,p.124）と定義されている。この空間にいる人びとは誰しも「パフォーマンスを観察する位置にあり、またそれが人に抱かせる状況の定義によって方向付けられている」（ibid,p.124）。そして、「表 - 局域における個人のパフォーマンスは、彼のその局域内での挙動が一定の基準を保持し体現しているという見せかけを与えるための努力」（ibid,p.125）であり、対して「裏 - 局域は、そのパフォーマンスの呈示される場所の反対側に、そこから隔壁によって切断され、廊下によって守られている。……表 - 局域に出ているパフォーマーは、くだんのパフォーマンスが進行している間に舞台裏の援助を受けることができ、短時間のくつろぎを得るために一時パフォーマンスを中断することもできるのである。もちろん裏 - 局域はパフォーマーがオーディエンスは一人も侵入しないものと安心していることができる場所である」（ibid,p.132）。このことが示すのは、ある局面において面目が回復不可能なぐらいにつぶれてしまっても、別の場所において自己の現実感覚をつかめるよう生きなおすことができるということである。芦川（2015）が指摘するように、行為者は、現在置かれた状況でうまく行動するために、その状況よりも広い社会を参照しているのである。

『スティグマ』に登場する、隠し立てしたいような生活誌を持ち合わせた人々は、その特徴から人々の目をそらすような言動をとる。ゴフマンは、両価的な感情にさいなまれた結果ではありつつも、スティグマを持つ人々は、自らの生活が少なくとも対他的には穏やかに運ぶよう、個人的アイデンティティを守っているという。例えば夫が精神疾患を患って入院していることを明らかにしないために、ガンであると偽り、近所の婦人たちに悟られないようにあれこれ気配りをすること。他者から期待されている対他的な社会的アイデンティティと即自的な社会的アイデンティティとが乖離しないよう、調整しているのである。これを、ゴフマンはパッシングという。そして、すでに事情が露呈してしまっているものは、カバーリングと呼ばれる情報操作を行う。ゴフマンが例示するのは弱視の者の振る舞いである。弱視のものは、それを周りの人々に知られているとしても、人前で積極的に字を読もうとはしない。なぜなら、文字を読もうとする姿が、人々から

奇異なものを見る視線を集めてしまうからである。つまり、「スティグマのあることを率直に認めることのできる人びとは、……スティグマにひそかに向けられた視線をこだわりなくそらし、〔両者が現に遂行している〕相互交渉の公式の主題に屈託なく没頭できる状態を確保し易くする」(1963, 訳書1987,p.167)。それらは、彼らによる、状況の定義の投企なのである。

『スティグマ』や『アサイラム』で描かれる、自己の領域を侵犯された人びとは、面目や体裁はつぶされている状態といえるだろう。つまり、面目が保たれていることが前提の、ノーマルな人びとが参加する、秩序維持のゲームのルールからは逸脱した、いわば外部にいる存在として考えることができる。しかしながら、二つの作品においては、外部に位置付けられ、疎外感にさいなまれる人々の、自らについて再呈示しようと試みる姿が描かれているのである。

ここで一度、スティグマの定義に立ち返りたい。スティグマとは、即自的な社会的アイデンティティと、対他的な社会的アイデンティティとの負の乖離であった。そして、その負の乖離は、固定的なものではなく、自己の置かれる状況によって変化するものである。ここまでで得た言葉でこれを説明するのであれば、即自的な社会的アイデンティティとは、個人が持っている生活誌から自我アイデンティティによって選定し、呈示したイメージであり、その人の持つ特徴がスティグマとなりうるのは、自我アイデンティティによって行動が決定されるときに、である。このことが意味するのは、ゴフマンが結論づけるように、スティグマを持ったものとは、ノーマルな人びとをも含む概念であるということである。

4．結論

ここまでで確認してきたゴフマンの相互行為論における自己とは、状況においてある程度振る舞い方が決定されてしまうような自己と、文化や制度から与えられた自己を拒否することで独自の自己を維持しようとする主体的な自己の二つであった。これらを矛盾したものとしてではなく、結びついたものとしてとらえたい。

坂本（2005）は、パフォーマーとしての自己がイメージとしての自己を呈示することは、パブリックな者として相互行為の秩序の維持や、その秩序を受容することを期待されたものであるという。しかしその一方で、個人にとっては自己を規定するものなのであり、自らが抱く自己とどのように関わることができるかとか、他者からその像が受容されるかどうかといったことが問題になるという。そして、このことを踏まえると、自己とは「社会的規範性にも個人による選択にも支えられた、まさに個人と社会との結節点である」(p.160)。ここに個人対社会という対立が見て取れ、シンボリック・インタラクショニズムの文脈で理解されることが多かった。しかしながらゴフマンは、必ずしもそのような意識のもとに自己呈示について論じていたわけではない。彼の問題意識は、先にも述べたように、社会に対してというよりかは、相互行為にあった。

第二節、第三節において共通してみてとることができたのは、再帰的な自己である。人びとは、他者から期待された役割から距離を置こうとする。そのことは、パフォーマーとしての自己が他者に対して呈示するイメージとしての自己を操作することを意味する。イメージとしての自己は、他者から解釈され、評価されることを通して再び自らのもとへ戻ってくる（相互的な面目の保持）。そして戻ってきた自己を自我アイデンティティが顧みることで、自我アイデンティティは刷新され、違った形での自己呈示が可能になる。これを繰り返すのが再帰的な自己である。このことが意味するのは、他者から期待された自己、すなわち社会的アイデンティティとは、自我アイデンティティがそうであると予想するものである。

秩序の維持という面に目を向けてみよう。個人が面目を保つことによってその場の秩序は保たれる。行為者は、自らについての負の乖離の構成しうるものが露見しないように、自らの情報を操作する。つまり、状況における規範は、その場に居合わせる個人の振る舞いによって定義される。人々は、波風を立てないというルールに則ってはいるものの、その状況において構築される規範は個々人の振る舞いに依拠している。

5．今後の展望

以上に述べてきたゴフマンの相互行為論における自己とは、場の秩序の引き受け手であったといえる。それは、単に状況に埋め込まれているということを意味するのではない。なぜ場の秩序を守る必要があるのかといえば、秩序が守られることによって「うまくやれている」という自己のリアリティを得られるからである。リアリティを言い換えるのであれば、自分らしく振舞えているとか、生きている（失敗すれば、「生きた心地がしない」）という感覚のことであろう。リアリティを仕掛けであると同時に報酬とするゲームに参加しているのである。そのゲームは、成功すれば自他ともに気分のよいものになるが、失敗すれば、そのルールが前面に出てくることがないため、察することができるかできないか、という自己責任のゲームということになってしまう。もちろん、居心地の悪さをスティグマや被収容者のやってみせたような自己の再呈示によって払しょくすることは可能であるにしても、それは一度、通常のルールから疎外される、というプロセスを踏むことになる。アイデンティティは自己責任の相互行為の中から析出されるということである。自己責任ではない自己のあり方とはどのようなものであるのか、今後検討していきたい。

そして、ゴフマンの呈示した個人的アイデンティティと自我アイデンティティの関係について。個人的アイデンティティとは、個人の、社会的事実の一連の記録のことであった。この社会的な事実のなかから選択した情報を他者に示すというのが自己呈示の流れであった。ここには、行為者が、自らの生活誌、過去をどのようにとらえることができるのか、という問題がある。本稿ではあまり触れなかったが、ゴフマンは自己をうまく保つための手法として、身を置く環境を他に移すことを挙げていた。行為者のそれまでの事情を知るものがいなくなったり、あるいは同じような目的をもった者と組むことによって、生きなおすことができるのである。生きなおすということは、認められてしかるべきものであるが、そのことが示すのは、生活誌というものがいずれ組み替えられるということを示唆するものであるように思う。片桐（2007）は生活誌について「あくまで現在の見方によって過去のさまざまな出来事を解釈した所産」であるという（p.19）。生活誌は、時間的に蓄積された確固たるものとしてありつつも、主観的に語りなおされるものとしてある。つまり、都合のよいように、納得のしやすいように。自己について物語るという視点からはどのようにゴフマンの自己論を見ることができるか、これについても今後検討をしてみたい。

注

（1）片桐 (2007) は、シンボリック・インタラクショニズムのなかに、主体主義と構造主義、構築主義という三つの傾向があることを見ており、ゴフマンを構造主義に位置付けている。三つは排他的でないとしているが、本稿においては二極する解釈という視座を用いるため、「秩序に埋め込まれた」という記述から、社会決定論的解釈をする論者として位置付ける。

（2）『スティグマの社会学』によれば、他者からの「特定の期待から負の方向に逸脱していない者」(1963, 訳書 1987,p.15) のことである。

引用文献

芦川晋「自己に生まれてくる隙間――ゴフマン理論から読み解く自己の構成――」『触発するゴフマン――やりとりの秩序の社会学――』新曜社 , 2015,pp.46-71

深津健次「E. ゴフマンの「役割距離」についての一考察」『ソシオロジ』（26）No.3,1982,pp.27-42

船津衛「自我のゆくえ」『社会学評論（48）』,1998, pp.407-418

Goffman,Erving., 石黒毅訳『行為と演技　日常生活における自己呈示』, 誠信書房 ,1974（原書 1959）

――――――佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い 相互行為の社会学』誠信書房 ,1985（原書 1961）

――――――石黒毅訳『アサイラム　施設収容者の日常世界』誠信書房 ,1984（原書 1961）

――――――丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造　新しい日常行動論を求めて』誠信書房 , 1980（訳書 1963）

――――――石黒毅訳『スティグマの社会学　烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房 ,

1987（訳書 1963）
――――――浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為　対面行動の社会学』法政大学出版局 ,2002,（原書 1967）
――――――椎野信雄「E. ゴフマンの「相互行為秩序」を読む（第 1 部）その一」,『人文学報（232)』, 東京都立大学人文学部 ,pp.105-123, 1992
速水奈名子「相互行為の変容」『社会学雑誌（19)』2002,pp.154-168
――――――「アーヴィング・ゴフマンの社会学」『触発するゴフマン』新曜社 ,2015,pp.1-25
岩田若子「「役割」概念の再検討――E.Goffman における役割距離の含意――」『慶応大学社会学研究紀要（28)』,1988,pp.11-21
片桐雅隆「シンボリック相互行為論から認知社会学へ」東北社会学研究会『社会学研究』（28）, 2007,pp.7-30
近藤泰裕「役割行動と社会的自己―E. ゴフマンの「役割距離」再考―」『市大社会学（1)』,2000, pp.1-11
宮内正「儀礼秩序の仕掛け」『ゴフマン世界の再構築――共在の技法と秩序――』1991,pp.65-99
坂本佳鶴恵『アイデンティティの権力――差別を語る主体は成立するか――』新曜社
高橋裕子「ゴフマン理論に見る「構造」――「構造」と「主体」の関係性――」『立命館産業社会論集』35（4）,2000,pp.37-57
渡辺克典「相互行秩序から自己、フレーム、トークへ――ゴフマン世界を生きる〈人間〉の知覚をめぐって――」『名古屋大学社会学論集（24)』2003,pp.85-102
安川一「〈共在〉の解剖学」『ゴフマン世界の再構築――共在の技法と秩序――』1991,pp.1-31
吉田正「社会化と自己呈示――主体性形成と論理を求めて――」,『追手門学院大学文学部紀要（14)』1980,pp.105-119